

サー・フィリップ・シドニーの手紙と女王の結婚反対運動

大 芝 香 織

序論

1579年にイングランド女王、エリザベス1世は、フランスのアランソン公 (Duke of Alençon) との2度目の結婚交渉を始める。女王がフランスのアランソン公と結婚を考えることになった背景には、スペイン王フェリペ2世の脅威があった。エリザベス朝の治世の初期においては、エリザベス1世は、フェリペ2世と友好的な関係を築いていた。しかしながら、イングランドが交易の拠点とするネザーランドへスペインが軍事介入をすることにより、関係が悪化し始める。

さらに、カトリックの脅威からイングランドを守るために、同じプロテスタントであるドイツのルター派の諸侯たちと政治的な協力を求めたが、ドイツ側から拒絶される。その結果イングランドは、スペイン、フランスというカトリック教国からの脅威にさらされることになった。ドイツのルター派との同盟は1560年代から提案されてきたが、その間、女王は、スペイン及びフランスとの関係悪化を恐れて、踏み切ることができなかった (Doran 29-30)。

イングランドの商業の基盤であるネザーランド、ネザーランドのプロテスタント教徒、そして、軍事力を拡大するスペインの脅威からイングランドを守るため、フランスのアランソン公との結婚が提案される。スペインの脅威に対抗するという目的で提案された結婚ではあるが、アランソン公との結婚には多くの弊害が生じる。

イングランド国内に大きな影響をあたえることになる。特に大きかったのは、女王の結婚に反対する国民の意見が表面化したことであろう。

フィリップ・シドニー (Philip Sidney) も女王とフランスのアランソン公との結婚を反対する手紙を書いた。 *A Letter Written by Sir Philip Sidney to Queen Elizabeth, Touching her Marriage with Monsieur*¹ (本稿では、以降 *Letter* と記載する) というタイトルが付されたシドニーが書いた女王宛の手紙は、宮廷内で回覧された。

本稿では、シドニーが女王へ書いた *Letter* の内容が女王の結婚を反対するイングランド国民の意見を反映したものであり、どのように表現されているかを考察する。また、宮廷内で回覧された *Letter* は、どのような役割を担っていたのかを論じる。

1. シドニーの *Letter* が書かれる以前の反対運動

シドニーの手紙が書かれた時期を正確に特定することはできない。しかしながら、1580年10月22日付のシドニーの友人、ユーベル・ランゲ (Hubert Languet) への手紙で、シドニーが女王とアランソン公の結婚について自分の見解を書いた手紙を書いたことが記されていることから、このランゲへの手紙を書いた以前と推定されている。また、1579年8月に出版されたジョン・スタッブズ (John Stubbs) のパンフレット、*The Discovery of a Gaping Gulf* との類似点があることから、シドニーが手紙を書いた時期は1579年11月あるいは12月と考えられている (Duncan-Jones 33-34)。

シドニーが *Letter* を書く前に、すでに、イングランド国内では女王とアランソン公の結婚を反対する者たちが行動を起こしていた。弁護士であるスタッブズが民衆へ向けて女王の結婚に反対するパンフレットを作成し、印刷していたことは有名である。スタッブズの *The Discovery of a Gaping Gulf* は1579年の8月に出版され、シドニーはスタッブズのパンフレットを注意深く読んでいたことが示唆されている (Duncan-Jones 33-34)。

女王が出席したロイヤル・チャペルでも女王とフランス公爵との結婚を反対する発言がされた。1579年のレントの第1日曜日に、“England did not need a second foreign marriage; Queen Mary’s experience was sufficient”

(Froude 149). と説教師が女王の御前で発言したことにより、女王が怒って立ち上がり、さっそうと教会を出て行ったというエピソードが書かれている。さらに、同じような言葉がロンドンのすべての説教の中で繰り返された(Froude 149)。

プロテスタントのエリザベス1世とカトリック教徒のアランソン公とは異なり、メアリー1世とフェリペ2世との結婚は、カトリック信者同士の結婚である。しかし、英国国教会設立後のイングランドをカトリック教国へと再び改宗することによるイングランド国内にもたらした宗教上の混乱は大きなものだった。また、メアリー1世の結婚を外交政策がもたらしたイングランドの不利益も大きなものだった。イングランドは中世以来、フランスを敵対していた。メアリー1世の治世では、メアリー1世の夫であるスペイン王フェリペ2世とともにイングランドはフランスと戦った。戦いには勝利するが、フランスはアイルランド東部のイングランドの領地であるペイルに侵略し、1558年1月に1347年以来、イングランドが占領していたカレーを攻め落とした。これは、チューダー朝においてイングランドで最も屈辱的な敗北である(Doran 2)。

さらに、メアリー1世には、フェリペ2世との間に世継ぎが生まれなかった。君主の外国人との結婚からイングランドが得た国益はあまりにも少なかった。宗教の点においてもイングランドの国益においても、メアリー1世とフェリペ2世の結婚は、利点がなかったことをロイヤル・チャペルの説教師は指摘したのだろう。

他にも女王の結婚を反対した人物はいた。1579年の4月にイーリーの主教であるリチャード・コックス(Richard Cox)が女王の結婚に反対する手紙を書いている(Wallace 211)。手紙の内容については触れられていないが、彼の当時の立場と行動からおそらく、宗教的な問題とエリザベスのカトリック教徒に対する政策に言及していたのではないかと推測できる。

リチャード・コックスという人物は、ピューリタンと称される人物であり、かれの所有するイーリーの館は1577年から1579年の間、イングランド国内のカトリック教徒を収容する牢獄として使用されていた。そして1588

年と 1597 年の間はとりわけ平信徒の国教忌避者の牢獄として使用されていた。エリザベス 1 世のカトリック教徒に対する国内の政策として、ウィズビーチ城とイーリーの館にカトリック教徒を収容していた。両方ともイーリーの主教の所有地であり、人里離れた場所にあった。最初に在監者として迎えられたのは、メアリー 1 世の治世において役職についていたカトリックの聖職者たちである。彼らは、1559 年のエリザベス 1 世の宗教政策決定、Elizabethan Settlement における英国国教会の慣例を守ることを拒否した聖職者たちであった。はじめにカトリックの聖職者と司教は、エリザベスの新しい主教に任せられ、彼らの家でゲストとして自宅監禁の下で生活することになっていた。1577 年 8 月 11 日、コックスは枢密院にウェストミンスター寺院の最後の大修道院長であるジョン・フェッケナム (John Feckenham)、を囚人として迎えたことを裏付ける手紙をかいている。コックスは手紙の中でフェッケナムの召使いも主人と同じカトリック教徒であることに対する不満を述べている (Young 195-97)。

1578 年 8 月 29 日にコックスがバーレイ卿へ書いた手紙ではフェッケナムが優しい人物であると述べつつも、カトリック教徒であり、とても頑固であると書いている。フェッケナムがプロテスタントの教義に完全に説き伏せられたと宣言したとき、コックスはこの大修道院長のカトリック教徒としての考えを変えようとしていた。しかし、うまくはいかなかった。コックスの手紙では彼が怒っている様子がわかる。この手紙で注目すべきは、フェッケナムのことを “the enemies of God and the Queen” (qtd. in Young 198) と称している点である。フェッケナム個人への敵意とカトリック教徒への敵意を同一視している。また、コックスのカトリック教徒に対する強い敵対心が読み取れる。

さらに枢密院宛ての日付のない手紙においては、コックスはあまりに寛大すぎる国内のカトリック教徒への扱いについて痛烈に非難している。

God be merciful unto us that we have suffered his enemies so long trail abroad, that the false prophets, and the head papists we have

nourished, some in prisons, some with Bishops, as who should say we cannot tell what to do with them, when God himself our heavenly father hath taught us by his blessed word how to use and deal with them. (qtd.in Young 198)

この手紙が示していることは、コックスはカトリック教徒への敵意が強いこと、そして、在監者であるカトリック教徒に手を焼いていることである。また、カトリック教徒をプロテスタントの主教の所有地で収監するというエリザベス女王の政策に疑問を投げかけ、その政策に自らが犠牲となっている不満を述べている。

フェッケナムの戦略は自分を収監した者たちに、自分が英国国教会に今にも同意できるのだと信じ込ませることであった。結果として、コックスはこの前大修道院長に苛立たされることになる。コックスのフラストレーションの一つはイーリーの館でのカトリック教徒の収監がコックス自身にもイーリーに滞在することを強いてきたことであるかもしれないと Francis Young は指摘している (198)。

1579年10月8日のコックスの枢密院宛の手紙ではフェッケナムの墮落した態度について言及をしている。枢密院はフェッケナムの召使いを解雇することを命じる。さらに、同年、フェッケナムはウイズビーチ城へ移動されることになった (Young 199)。

リチャード・コックスが女王とアランソン公との結婚に反対する手紙を書いたのが、1579年の4月である。ちょうど、大修道院長に対する不満とカトリック教徒への敵対心が募っていた時期であったであろう。もし、女王がカトリック教徒であるアランソン公と結婚すれば、カトリック教徒の大修道院長を収監しているコックスには、身の危険が迫ることになる。国内のカトリック教徒による報復も十分にあり得ることであった。また、カトリック教徒を長期間、収監するというエリザベスのこれまでの政策が覆る可能性は十分にある。コックスはプロテスタントの主教として、また、カトリック教徒を収監しているイーリーの主教としての立場から女王の結婚に反対していた

と考えられる。

このようにシドニーが女王の結婚を反対する *Letter* を書く前に、すでに、女王はジョン・スタッブズのパンフレット、ロイヤル・チャペルの説教師からの言及、そしてイーリーの主教からの手紙により、結婚に反対する声を聞いていたはずである。さらに、イングランド国内の民衆の間では以下のようなバラッドが歌われていた。

A Method, not Sharply Englished

The kinge of ffrance shall not advaïnce his shippes in English sande,

Ne shall his brother ffrancis haue the Ruleng of the lande:

Wee subiects trwe untill oure queene, the forraine yoke defie,

Where too we plight oure faithfull hartts, *our* ly^mes, *our* lyves & all,
thereby to have *our* honor rize, or take *our* fatall fall.

Therefore, good ffrancis, Rule at home, resist not *our* desire;

for here is notheng else for thee, but onely sworde & fyer.

(*Ballads from Manuscripts* 114)

このバラッドから女王とアランソン公との結婚が、フランスのイングランド支配をもたらすと民衆が考えていたことがわかる。そして、プロテスタントからカトリックへと宗派が変わることへの危機感と、それに抵抗しようとする民衆の意思が表れている。先に述べたように、ロイヤル・チャペルだけでなく、ロンドンの説教でも女王と外国人との結婚に反対する言及があったのであれば、このようなバラッドが民衆の間で歌われていたとしても不思議ではない。スタッブズの出版したパンフレットが民衆に与えた影響も大きかったのだろう。

女王は、メアリー1世とフェリペ2世との結婚を例として、外国人であるアランソン公との結婚を反対されること、カトリック教徒を収監するという政策をとっている女王が、カトリック教徒と結婚するという宗教上の問題に

よって反対されていることを、シドニーが手紙を書く前に、すでに経験していた。

2. シドニーの *Letter* の表現

Malcolm William Wallace はシドニーの *Letter* の特徴を以下のように述べている。シドニーは女王に対するお世辞がほとんどなく、謝罪もあまりなく議論を始めている。また、彼は女王の主な強みはプロテスタントの派閥によって成り立っているという主張をし、フランス人の気質、アランソン公の時折、激しい、時折、冷静な気質と一族の不実さを述べている (216-17)。さらに、Katherine Duncan-Jones は、シドニーが結婚の議論において女王がもっとも嫌ったであろう 3 つのことを理解していたと論じる。1 つ目は結婚を望む女王の誠実さ、彼女の誠意を問うこと。2 つ目は女王の後継者について議論すること。3 つ目はアランソン公に対する個人的な攻撃である。シドニーは手紙の中で、これらの議論について、注意深く扱っている。特に、後継者については、46 歳という年齢の女王が結婚をし、子供を産むことに対して疑問を投げかけることも、否定することもない。シドニーが本当に信じていたかは疑わしいが、スタップズがパンフレットで言及したように、高齢での出産により、女王が死亡する可能性を言及することも、アランソン公の醜さについて述べることもない (37)。

シドニーが *Letter* の中で述べている後継者については以下のような遠回しな表現が目立つ。“As for the uncertainty of succession, although for mine own part I know where I have cast the uttermost anchor of my hope, yet for England’s sake I would not say anything against any such determination”(54). また、アランソン公に対しては“I will not show so much malice as to object the universal doubt of all that race’s unhealthfulness;”(50) と彼の気質のみに言及している (Duncan-Jones 37)。

しかし、シドニーが評するアランソン公の気質は、イングランド人が考えるフランス人、カトリック教徒、そして彼の一族の気質がすべて彼自身の気

質としてあらわされている。また、それらの言及は、シドニーが手紙を書く前にすでに、ロイヤル・チャペル、スタッフズのパンフレット、そして、おそらくイーリーの主教が書いたと推測できる内容をほのめかしている。

シドニーの *Letter* の中でのアランソン公に対する言及は、イングランドの国民がどのように女王の結婚を考えるかという文脈の中にある。

Those, how their hearts will be galled, if not aliened, when they shall see you take to husband a Frenchman, and a Papist, in whom, howsoever fine wits may find further dangers or painted excuses, the very common people well know this: that he is the son of the Jezebel of our age; that his brother made oblation of his own sister's marriage, the easier to make massacres of all sexes; (48)

アランソン公に対して“Frenchman”、“Papist”、“the son of the Jezebel of our age”という呼称を使っている。我々の時代のイゼベルの息子とアランソン公を呼ぶことにより、彼がバーソロミューの虐殺を主導したカトリーヌ・ド・メディチの息子であることを強調している。

さらに、シドニーは続ける“that he himself, contrary to his promise, and against all gratefulness, having had his liberty and principal estates chiefly by the Huguenots' means, did sack La Charité and utterly spoil Issoire with fire and sword”(48)。ラシャリテ (La Charité) とイソアール (Issoire) はサンジェルマンアンレの条約により、フランス国内でもユグノー、プロテスタントの安全を認めていた町であるが、1577年の春にアランソン公が条約を反故にして、ラシャリテの町とイソアールの近隣の町を占領した。この出来事はスタッフズのパンフレットでも言及されている²。

シドニーは、まず、イングランドの民衆が知っているフランス国内の出来事であるバーソロミューの虐殺とサンジェルマンアンレの条約を反故にされたことを述べる。この二つの出来事に象徴されるのは、アランソン公あるいは、ヴァロア家が誓約を反故にする一族であるということ、そして、彼の

族が持つプロテスタントに対する強い敵対心である。シドニーはプロテスタントへの彼の強い敵対心を表すためにあえて、最初にこの出来事を言及しているのだろう。

バーソロミューの虐殺が、ヴァロア家の娘とユグノーのリーダーとの結婚式で起こり、新郎の家族とユグノーの信徒たちが虐殺されたことを述べることにより、エリザベスとアランソン公の結婚がこの第2の虐殺の被害となる可能性も示唆しているのかもしれない。

フランス国内におけるユグノーへの扱いを言及することでアランソン公の結婚がイングランドのプロテスタント教徒にもたらす悪影響を示唆し、以下の文で、イングランド国民が彼を受け入れないであろうことを述べている。“This, I say, even at the first sight, gives occasion to all the true religious to abhor such a master, and so consequently to diminish much of the hopeful love they have long held to you”(48).

シドニーは、バーソロミューの虐殺を行った一族として、アランソン公を定義したのち、国内でのカトリック教徒の状況を以下のように述べている。

The other faction, most rightly indeed to be called a faction, is of the Papists: men whose spirits are full of anguish; some being forced to oaths they account damnable; some having their ambition stopped, because they are not in the way of advancement; some in prison and disgrace; some whose best friends are banished practisers; many thinking you an usurper; many thinking the right you had, disannulled by the Pope's excommunication; (48)

上記のイングランドのカトリック教徒の状況はイーリーの主教、リチャード・コックスの国教忌避者の監獄を連想させる。イングランド国内のカトリック教徒たちがプロテスタントの教義を強要され、野心を止められ、ある者が投獄され、面目をつぶされているという状況は、コックスが収監している大修道院長のフェッケナムを思い起こさせる。また、カトリック教徒の多

くがローマ教皇の破門により、女王の王権は無効であると考え、女王を強奪者と考えているという記述は、コックスがフェッケナムを“the enemies of God and the Queen”と称していたように、カトリック教徒も女王を神の敵であるとみなしており、相容れない状況にあることを述べている。

さらに、シドニーはイングランド国内で起きたカトリック教徒の反乱を思い起こさせ、“Now for the agent party, which is Monsieur: whether he be not apt to work upon the disadvantages of your estate, is to be judged by his will and his power”(49).と書くことで、カトリック教徒であるアランソン公との結婚がもたらすと考えられるイングランド国内での混乱を示唆し、アランソン公の気質を暗に批判する。これらの記述は、イーリーの主教が書いた手紙を示唆しているのではないだろうか。

最後にメアリー1世の結婚を引き合いに、外国人との結婚が好ましいものではないことを述べている。“Lastly, and most properly to this purpose, she had made an odious marriage with a stranger, which is now in question whether your Majesty should do or no”(55).これは1597年のロイヤル・チャペルでの説教で発言された“England did not need a second foreign marriage; Queen Mary’s experience was sufficient”(Frounde 149).という女王を立腹させた言葉を柔らかくした表現へと変えている。

このようにシドニーは、アランソン公をフランス人、カトリック教徒、イゼベルの息子と定義することで、外国人と異教徒という性質、そして、プロテスタントの敵であり、有言不履行という彼の気質を一緒くたにしている。

シドニーはアランソン公の女王との結婚にたいする不誠実さ以下のように問いている。

his thrusting himself into the Low Country matters; his sometimes seeking the King of Spain’s daughter, sometimes your Majesty; are evident testimonies he is carried away with every wind of hope, taught to love greatness any way gotten, and having for the motioners and ministers of his mind only such young men as have shown they think

evil contentment a sufficient ground of any rebellion; (49)

さらに、シドニーはこれらのアランソン公の気質を述べたうえで、イングランド国民が彼を歓迎しないということについては、比較的、明白に書いている。

This only will I say: if he do come hither, he must live here in far meaner reputation than his mind will well brook, having no other royalty to countenance himself with; or else you must deliver him the keys of your kingdom, and live at his discretion; or, lastly, he must separate himself, with more dishonour and further discontentment of heart than ever before. (50-51)

上記のアランソン公を歓迎しないというイングランド国民の記述は、前項のイングランドの民衆の中で歌われていたバラッドを示唆しているのではないだろうか。バラッドは、アランソン公のイングランド上陸とフランスによるイングランドの支配が同等であるかのように歌われ、戦いもいとわなないイングランド国民の強い抵抗を示したものであった。シドニーの記述は国民の支持が得られず、アランソン公が正統な名声を得られないというアランソン公の立場に配慮したような言い回しとなっている。

このようにシドニーの *Letter* は、すでに女王が耳にしていたと考えられる内容を遠回しに表現している。

3. *Letter* の役割

前項で述べたように、シドニーの *Letter* には、スタッフズのパンフレット、ロイヤル・チャペルでの説教、そしてコックスの手紙を連想させる記述を遠回しにするという方法でアランソン公の気質を述べ、イングランド国民が受け入れられないことを記している。

シドニーが意図的に、連想させる内容を書いていたのであれば、それは、イングランドの国民の声であったからであろう。

Maureen Quilligan は、シドニーは女王の結婚に助言することで、宮廷内における男性の権力を肯定していると主張する。それは文化的に、女性の結婚の選択は女性自身ではなく、男性にあるという権利である。また、宮廷人には、女王に助言するという権利があり、女王は君主とはいえ、女性であり、父権制社会においては、階級や年齢よりも男性という性に特権があることを示している。そして、それは、女王の王位の権利を制限していると論じる (76, 85)。

Quilligan が論じるように、シドニーが父権制社会における男性の権利を強調し、女王の結婚に反対していたのであれば、女王の意志よりも国民の意志、とりわけ男性の意志の方が重要になってくる。シドニーが *Letter* の中で民衆、聖職者の声を想起させていた意図は、女性である女王の結婚には、イングランド国民の声を無視できないことを宮廷人として女王に助言するためであろう。そして、女王に助言できる権利を持つ宮廷人たちの支持を集めることが重要であった。それゆえに、シドニーの *Letter* は回覧されていたのだろう。

1580年の秋に女王がアランソン公との結婚をやめることを決意する。イングランド国内では、宗教を理由に国民が結婚を反対していたため、女王は、結婚交渉を進めることができなかった。宮廷内では、結婚に賛成する派閥と反対する派閥に分かれていた。結婚に反対していたレスター伯とウォルシinghamの派閥では、1579年の10月までに宮廷内で多くの支持者を獲得していた (Doran 39)。

シドニーの *Letter* はマニユスクリプトが20部、そして、印刷された原稿が4冊現存している。しかしながら、シドニーの直筆の原稿は存在していない (Duncan-Jones 38)。これだけのマニユスクリプトが存在していることが示すのは、シドニーの手紙が広く回覧されていたということである。しかしながら、1579年の10月までにすでに多くの宮廷人が女王の結婚に反対していたのであれば、シドニーの *Letter* が書かれ、回覧されていたころには、

おおよそ、宮廷内では結婚を反対する動きが強かったことになる。すでに、宮廷内で、結婚に反対する動きが強かったのであれば、シドニーの *Letter* には、結婚を反対する支持者を集める以外にどのような役割があったのであろうか。

シドニーは *Letter* の中で、女王自身の治世の安定性を強調し、女王の治世の継続性が望ましいという主張をしている (Duncan-Jones 37)。それは、以下の文面に表わされている。

But things holding in the estate present, I think I may justly conclude that your country, being as well by long peace and fruits of peace, as by the poison of division (whereof the faithful shall by this means be wounded, and the contrary enabled) made fit to receive hurt, and Monsieur being every way apt to use the occasion to hurt; there can almost happen no worldly thing of more evident danger to your State Royal. And as to your person, indeed the seal of our happiness, what good there may come by it to balance with the loss of so honourable a constancy, truly yet I perceive not. (50)

シドニーはアランソン公との結婚がもたらすものが、女王の治世が築いてきた平和と安定性の危機であることを述べている。さらに、以下の文では、イングランドの国民の女王への忠誠心を強調するとともに、女王にイングランドの国民に目を向けるように述べている。

Look in your own estate, how willingly they grant, and how dutifully they pay, such subsidies as you demand of them; how they are now less troublesome to your Majesty in certain requests than they were at the beginning of your reign; and you shall find your Majesty hath a people more than ever devoted to you. (54)

そして、忠誠心のある国民に応えるべく君主としての在り方を“Virtue and justice are the only bands of the people’s love. And as for that point, many princes have lost their crowns,”(54) という言葉で君主としての女王に国民との団結の重要性を説いている。

しかし、シドニーが最も女王へ伝えたかったのは以下の言葉であろう。“I do with most humble heart say unto your Majesty that, laying aside this dangerous help, for your standing alone, you must take it as a singular honour God hath done unto you, to be indeed the only protector of his church”(56).

イングランドにとって、女王とアランソン公との結婚の目的が、カトリック教国であるヨーロッパ諸国からの孤立とスペインの脅威に対抗するためであった。シドニーはあえて、イングランドのプロテスタント教国として孤立することを勧めることで、女王の結婚を反対している。結婚によるフランスとの同盟でスペインの脅威に対抗するのではなく、英国国教会の長として、神が与えた名誉を守るためにスペインの脅威にもカトリック教国の脅威にも立ち向かうことを説いているのである。

このように、シドニーは女王の結婚を反対する際に、イングランドの国民に目を向け、国外ではなく、国内に目を向けるよう説いている。女王が一人で立ち向かうためには、国民の団結が不可欠である。シドニーの女王への *Letter* が宮廷内での結婚反対派の支持を多数得た後でも、回覧する必要があったのは、プロテスタントの国として、国民を団結する士気を高める必要性があったからではないだろうか。

また、スタップズのパンフレット、イングランド国内で歌われたバラッドは一般市民の声であり、ロイヤル・チャペル、コックスの手紙は聖職者たちからの声であった。シドニーが *Letter* を書くことで、宮廷人の声として市民の声も女王へ届くことになる。シドニーが *Letter* を書いた意図は、君主の立場を除く、イングランドの主要な階級が結婚を反対しているという表明となったからではないだろうか。

結論

本稿では、シドニーが女王へ書いた *Letter* の内容が、スタッフズのパンフレット、市民の間で歌われていたバラッド、ロイヤル・チャペルでの説教、そして、コックスの手紙を想起させるものであったことを論じ、シドニーが *Letter* の中でどのように表現しているのかを考察した。アランソン公のカトリック教徒として、そして、ヴァロア家としての彼の気質を論じる際に、これらを想起させる内容が基となっているよりも遠回しな柔和な表現となっていることを確認した。また、女王に助言できる権利を持つ宮廷人として、シドニーは市民の声を届ける役目を担っていた。

さらに、シドニーの *Letter* が宮廷内で広く回覧されていたころには、女王の結婚を反対する支持者が多かったと考えられている。それにもかかわらず、回覧されていた理由をヨーロッパのカトリック教国に対抗すべく、国民の団結する士気を高めるためであると論じた。

注

- ¹ 本稿における *A Letter Written by Sir Philip Sidney to Queen Elizabeth, Touching Her Marriage with Monsieur* の引用は *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney*, Edited by Katherine Duncan-Jones and Jan Van Dorsten Oxford UP, 1973. による。また、引用は頁数のみを記す。
- ² *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney* の pp.182 Commentary を参照。

引用文献

- Ballads from Manuscripts* : Edited by F.J.Furnivall and W.R. Morefill, vol.2, AMS Press, 1968.
- Doran, Susan. *Elizabeth I and Foreign Policy, 1558-1603*. Routledge, 2006.
- Duncan-Jones, Katherine. Introduction. "A Letter to Queen Elizabeth." *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney*. edited by Duncan-Jones and Dorsten Oxford UP, 1973, pp.33-45.
- Froude, James Anthony. *History of England from the Fall of Wolsey to the Defeat of the Spanish Armada*. Vol.XI, Part 5, AMS Press, 1969.
- Quilligan, Maureen. *Incest and Agency in Elizabeth's England*. U of Pennsylvania Press, 2005.
- Sidney, Philip. *Miscellaneous Prose of Sir Philip Sidney*. Edited by Katherine Duncan-Jones and Jan Van Dorsten Oxford UP, 1973.
- Wallace, Malcolm William. *The Life of Sir Philip Sidney*. Cambridge UP, 2010.
- Young, Francis. "The Bishop's Palace at Ely as a Prison for Recusants, 1577-1597." *British Catholic History*, vol. 32, no. 2, 2014, pp.195-216, Cambridge UP, <https://doi.org/10.1017/S0034193200032167>.